五月の朝の花

岡本かの子

もものしい桜が散った。

だだっぴろく……うんと手足を空に延ばした春の桜が、しゃんら、しゃらしゃらとどこかへ飛んで行ってしまった。

空がからっと一たん明るくなった。

しんとした淋しさだ。

だが、すこし我慢してじっと、その空を仰いでいた。

じわじわと、どこの端からかその空がうるんみ始めましたよ、その空が、そして、空じゅうそのうるみが拡がって。

その時、日本の五月の朝の中空には点々、点々、点々、

点々。細長いかっちりした薄紫の鈴——桐の花です。お洒落でつつましやかで、おとなしくてお済しで、群っていても実は孤独で、おっとりしていてもなかなか怜悧で。しのびやかにしかもはればれと桐の花。

桐よりも、ずっと背が高いのにせんだんの気の小さいポチポチ花。

だが咲くだけ咲いてしまえば実に思い切りよく大ふうにさらさらと風にまかせて銀砂の様に私達の歩道に、その純白の粉花を一ぱいに敷きつめてくれる。

もう少し行って御らんなさい。

そら、大粒の赤玉、白玉のメノーを七宝の青い葉茎

がくっきりうけとめている、チューリップ！

ルビーと紫水晶のかけらのスイートピー。

くじゃくの彩羽の紋所ばかり抜いて並べたパンジー。

毛唐国の花だとさげすみながら、人は何と争って五月の花壇の真中に何よりも大切にこの宝石の様な花たちを、栽培するようになった事よ。さて、その花達に夜の間宿った露、朝日が射せば香わしいほのかな靄となって私達のもすそをしめらす。

目をとめてよく見ると、半開きの白ばらの花のかげ――肥料をやりたての根本の赤土の上に生れたばかりの小さいひきがえるがよちよちしている。

お！　八百屋が、大きな玉菜とオレンジを運んで来た。勝手元の方へ知らせてやろう。

底本：「日本の名随筆1　花」作品社
1983（昭和58）年2月25日第1刷発行
1991（平成3）年9月20日第19刷発行
入力：渡邉つよし
校正：菅野朋子
2000年6月3日公開
2005年11月8日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。